繪本
奇談

樹々話

ヘ 13
3542
3

高く浪花出利巻之二

むかし青毛を常水色らくしつゝ
国分の帯しにこそなとのべ離きみそかね
おもし綾きおつし縁めづらしくゆかしこ
の名所あれたな路よ立より彼江多縁な
風景の地よく八一前れ口吟をなしぬ
ある宗の景色の地めて彼七なゐ諸なひなるハ
何と流ゐ名日了浜来桜相分と出ま残
書出るが何とはなしきく相貌をなひ玉

早稲田大学図書
青山
門 へ 13
雜 3542
巻 2
早稲田大學図書館
昭31.10.5
藏書

いぬが家(これ)にも志しち種ども筆結ひに習ふて
一ッ切りし花やしてんで連(つれ)の与ふたる
こゝや能(よ)からぬ鉛(なまり)が一ッばかりに見へ申し
それば治を出見さあり治からしや
ちんでよ小判(こばん)さむけ数(かず)ぐる治を語
いふ稚(ちや)葉(これ)と一角(かく)いふ書置し其稚方
もうふへ見たまへしし金屋(やこて)こそりおし
志ばしくかんがへて一ト目臭(きう)紙(し)ふ書(き)
射てゝ出しけれ共何(なに)ともおもへば紙(し)の
事なれが面白(おもしろ)き事サア仮名手本の

きもしやとしめらを継(つひ)よいふと筆ハ
なかなかの細(さい)工(く)所(しよ)の珍(ちん)聞(だん)様(さま)へあげゝく
前る額(がく)をみれぞ長(ちやう)い句(く)ともし句が
おもふべく書(ひ)てあねを出別(べつ)筆(ひつ)さ角し候
しられぞあきま程(きやう)ゐといふよのことの筆
国(くに)りとでと府(みや)中(ち)なゝハ進(きん)年(ねん)こそ
まかりまりてとしるが名(あさ)所(こ)方の中しなゝす
でたる魚と思ひやの治金ござ
のと聞いきあら只ぞそこしい津半ハあれど
きしぬがなめ拾ひいつ隠れもいつそしゆるも

今師の法もある事じやげなされども
それを吟味しては むつかしい事 それ
ゆへ とんぢやくなしに 俗しいふて 私らも
よくしらねども 俳諧さへ 数人て こんなよ
せうと 前を 記して 筆紙 料り 書付
出し たれぞ 先の 俳諧 でも あつめ 給い 出来
ましき まり 先の 俳し しで お出来 まし
てもそれの 俳の 歌の 中の 知とも申さぬ 謎く
の名を書つけさへすれば よろしうと云へば
俳諧師 申し 程なく ハ 狂名といふがあれ

どふぞどふぞ 狂名をなさしてくださりまし
あんじられるうち 俳諧 きりと 思ひ付よう
しられては 此節の 玄奥じやとて 江戸
玄人衆 よりみと 世の ひまし きその中
にある名を 覚えて 歌よみ 先の 名人
係りに 言へまりして おもふとしても 浮かれも
先の 節のろふがそして その名を付と云ひ
ましとも つは 俳諧師 まへ その中より
竹馬頃という名が 出来たるも 子供
のうちより 付ける事と なりまして まく

筆かまづさしが名よそこつ月てる居中て
いふもなかなかされる田鶴群る窓の文机
霞喜洞なくしいふもゆかしきまこと似たらむ
うつれ名かゆかしく思ひてされし草柄大ゆ引帆
とハさい名ぎる道中あさ知名名まざくて
外色しまな名があれこと思ひ出し侍り
されしよ名ありさまもめで作る語られく
よみあげたる

更衣　　　霞喜洞

脱ぎかへる袂も今きてみし乃

志はしハとゐれ書の移り香
　　　墨楓　　　竹ろてころ深禎
洞らちての形よ似らぬミクかえく
あふくるも出来とくハおしれ
　　　窓の文机
散るとみれ枝の花葉れあちちみハ
みしもいしくも麦乃秋風
　　　卯花　　　千舎有義
卯の花れさしとみへて深こころらすハ
むさいれ年家乃雨ちれはり

杜鵑

田鶴群鳥

ゆきかふは投出す道のまへがみに

しめりし馬乃沓手綱

亀行軒無駄丸

なきつの声をきのふの夜々まさ

ましひし嫉しき知郎公

蛤吐楼団好

謡をうしと思ひぬ布子かるゝの

話ちんもるくまく時鳥

清冷亭氷丸

驛路り帰るしきれ一声を

日記より耳にとめしられしき

山手赤蔕

橘

菖むしかもねじでうこんの橘あて

りさりまく白妙袖のうたり香

生酒屋生細

梅雨

長あけをいとふて碁もれ木の子よく

傘ありていけるさゝしれ

大根唐味

白みつき花をかくれし梅乃雨

かとかきちらし新の玉ふる

篝火　ゑび漉むす子

痩し子をたすけ行てまゝ旅火箱

目もすがら眼ぐるの街の篝火

蟬　今朝尺目積

うは夜へ吉川としこしたる浦蟬

夢は高くひりひ語らる蟬

鐘聲幽　草栖大小引肌

山遠く風のあふぬの餘ひ乃

かのこえ下もしに響く入相

と吟ずる絶句も何とも其まゝ出来がたく

おり〳〵絶へてゑがひてなじむ行水かげとり

ものや日をたつ京都めぐり君あれば

まづ日本の櫻草朝日に御門を賑わせ

そまつなり操盆二新茶屋の庖丁か

田地驚くし清水の寄る調を見て

かく鳴らし賤花手かね見さが寄ちとあれ

あづとおしたる大佛は名ぬき打つ

礎りしきりと消し霊堂へ上りて見て

さらくを書い山をも江戸まで八を見

此たきさてゑ浪理して悪事出ぬ打掛町
へかくまひくハおちる事と離しにんで
ま浪人をつけねらひまし足をり宅より
伊賀の三ばんといふを伏見の宿に召ひ
出し宿を出る時此人あり傾城あそ
神の事かその様子を告ひし事
そうらおゝるしく思ひつれなけりぬ粮
荒まかくまあるて斉ひ大坂へも立ち退き
乃しくゑん所まべしといひけるば何れも
まつ京都のうち又西国へ多しくそれとも

気色もせまでありけれバさしくいひそがしき
時は扨それと一日も早く海国を伏見し先
此度ハ是より出見の御所をもとめてあらん
伏見達りいふやう紫の清の御供なる
四郎の事あれども一人気りてまるべし
くらくもまづ一夜日ハ逗留の事なるれば
是の様子をたゞしじ翌朝にわまるまで
待たまへとてまた路次の御伴いたす
西ゆきいひ船是より多くましくて御見へ
行き翌朝まのり翌船大坂へ急ぎて

塩竈へ詣でゝ数へかたりし結こび
連も暁に起して籬ヶ島に風呂敷包
とおもひぬそれより小舟を仕立て
是に乗り浦船にのりしに乗合船の
あるじのさほ江戸の人にて奥州の者田舎
のまりの京都の人めかしくにて兼葭
訓を八百屋ある人むかしのやうすにて
横槍乃あかも縷むすび浮かれ
嘩かりしはばかの名ありし東
もおもひけるにてくるに平潟乃

酒らふりんかと嘘にもめでたしく漕行
まゝみちや大坂は八刻みぞ並ぬる千鳥
松島のくと唄ひかゝるそきより茶屋
にてより支度などして塩竈乃店
をたづねしも竜よし塩より海老
に一節うちまじまゝぎあそびて数へ
夕ぐれにあらしく行あひにいたりしたり
きんぜ道にかゝれ服店に入り道にて
聞くべき人もなくいよいよ山道しげ
まよひゆる折からし荒きよりはるばるく

あれ渡りまゐらせ給ふ気を笠取りても
雨を凌ぐ便き用意もなくいかでハさん
とおもひしに亀角に診察あつて細くも
降るも候なくばなほまゐらせ候ひし〳〵
気移り降りて後おもひけれども雨ハ志きりに
加り増るなれバ待つてれでおかしの町並
小鱗気をあり先生より[illegible]
おかし世雨をかくしまつりし天世なり
絶なけたゞこの古代気なれバ古も絶
しとあんてふ古お茶を窺出してる

鱗気をきざみ居るが名合り蝸牛り
しよ雨志きりて続く哉りなる
しく思ひ條を諸て名弱[illegible]を候を
此色小かゝりてもとれぬかまことを
合根みしをじきに思ひと焼けれハ此色
小雨をなどの意る郷をこきぬをふ
縁もバ[illegible]て通て候[illegible]ごとき
りそこへてし八候居へ気る前でも待りまれが
此路の通り名をハごきしび笠ぞりで
縁気てくし[illegible]ぞ気たてありと

毎夜(まいよ)やさうばかりしけるが御さ候かとひ
きゝば御尋(たづね)ひ事ゆへ何も御座りま
せぬ手前へ御帰(まいよう)へ御立寄りハ又ゝ遠(とう)ひ
ましき事をござれハ家内(ない)へ出ますと今
みきてくるまハこまりさるゝぞんじて
成がちがひまして寄進(きしん)答(き)参(まい)り
ましさ有(さ)るみても此町内ちよ一寸御寄(よ)
所さ御座候まゝと問(と)へで下さるやう
此まちハ所(ところ)の役人衆より岸(きし)しも御座
つけられしく餘人(よじん)をとゞめる事ハ無(む)し

くありませぬとらふ偖(さて)此やうな難(なん)
儀いたす事ハござりませぬ此雨ハ夕方
を止(や)ミませうと問(と)ひかけ下さいやく
らの雨(あめ)ハ降出(ふりだ)しの刻限(こくげん)が悪(わる)くござれバ
中々今夜(こんや)ハ晴ますまいと申うち
日も七ツ頃(ころ)りいより候ぬ最早ハせんかたさ
なく御亭主よ御無心(むしん)ながらござりますれ
かり寝よ御了簡(らん)の通(とお)り為遣ましよ別紙(うんき)を
及ひませうに先より出しも無(よ)く今
ましてハ難儀(なんぎ)なる所も売へぞまし御

雨ふりこありましハ御法度とあるときハかし
て油りハ御無心申ませぬぞしぞ夜の明る
まくは西戸の外軒下で腰おかれく
やまれるば宗ふ存まれとんと店な
く軒こりまさば下をいふ其格子御座で此殿
事や御とうつとも家の毒よるんでますすれば
どうぞ隠して御りも御酒めやたふこさ
申ますが此遊の座けりようしい町家分し
七八軒自とひ軒はやまゆるれハとく
夜中ごさいまさばこるへしが合点で御座

へまおとひおもきば御役人ふとし笑え
ましてハ悪しく私乃難義ござりまん
きば是のどくなふは事とてとも御座り
やよすとなひまれハ御今路もはよふな
随意年ハあるまれとて料簡も落つゝ
ず致る御ずり御ら町内の者とく
國家やへまりし違ひ御縁のうきへ
下るとうび御らましやき一家ひふ家内と
御ひふ別まりし御ぬ縁みし下との
いふ私は雨をまして あがりませんおし申

日も暮(くれ)まゝ是バ如何にして御宿あかさるも
ゐらんぎ又いかにとおもひわづらふこと
仕出(しいで)が清くば隣(あま)り家(き)をたのみて泊り
まほしくおもひけるに此家(いへ)かゞやき給ふしや
あすこれより諸(あく)坂(さつ)の下を右へ行
こんざあきたる藁(わら)屋(や)の門(もん)へかゝりければ是へ
御出なされし一夜の宿を御かし下さりと申
こらへじまぜ此宿(やど)中さつまいもしも御座ませ
きぬいまの御(ご)免(き)ぬ雨(あま)具(く)は此御心(しん)
さ御出なされ あまへ此ほかにも絹(こう)が

おしへられいろ/\なんぎにゐ遊なさり
まぜあれまでいろ/\しけれバくはしと
一まん余(よん)ぜん寄(まう)し潮(よう)三日町もこまるとかし
をばきをかくしけるにかへり候ハ
とひてあらぬしめしてもかかりまれバ
承(しょう)りでと語りをさせていひ候しれをかくし
て此三日丁ともくり坂(さう)をとゝりけれバ故へて
すりこんごあきたるをもへ門をこしてしまうさ
より門の下は入り内の家(かう)をたのみで玄関(げんくわん)
まへ広(ひろ)き事 偉(りつ)派(ぱ)さいふ絵山図

の重き役人とも思はれ物々しく広き車
かゝるちき物ひつめぐし節目正しく右の
方をとほれば廏建つゞきにて棟とおぼしく
其屋乃数を尽し中々ことを記しく
庭へ入りてたのしバ格ぞしめよなどあふ庭きこと
志れずと薦ぞ門のかたげに家笠をぬぎ
おそろしく内玄関へ行きちがひをつれむ
大名らしき家老なぞにしも流石に田舎
もし広き奥にて其中に若き女七八人居ならび
んで機を織居たるにいつし業肉をとひ

されどその中に年かさしき女機織さし
て立出て行きこより出むかへさとされば
伴ふ給ふ小縁とかゞめてをさししハ本国より
行よしへ参詣いたす者でござりまするがあり
あひ名をバ出さぬ者なれば日ハ暮れまさる夜乃
旅宿も様さりし殿様なれバ何卒
御むしんながら御屋敷の所のかたはらのきれ
なりと又ハ門の下にありとも一夜さし
置れ下さるならバあかくて御ゐたりまた
りしてまでもなりませぬやうと合掌

とこのみなりたおりしやまりませてたまひなれき
かまへませまりしはなくてはまちがされませ
ともひ捨(すて)置(おく)事入りたるあらもなく中年
のは家に奥(おく)様(さま)とも人の苦男(かとく)となりのひま
おとなりの年始まゐらしハかまへでハなけり
まはうて世事をれそあいつ継親(まゝおや)ごさるとも妻(さい)
初(しよ)乃かりむきをつくしのべてためこまれ
は男のある根(こん)出(じやう)合をも人をかきけましうぐ
お安(やす)いするはとなりなされませてなれまいる
まつはよきうねませそれは洗足(せんそく)のは湯(ゆ)結

おちぬれといふ事(こと)なれバあまりに女と覚つく
塗(ぬり)盥(たらい)もり蒔(まき)絵(ゑ)乃湯(ゆ)次を始とし高(たか)絵(ゑ)より
蒔絵の手(て)拭(ぬぐひ)かけまでぬくひを摺(すみ)おかこれ
まつくわそあしをおもちいしかへりませぬひ
これを湯桶ハ筵随なくいやしく高(たか)蒔(まき)絵(ゑ)
床(さ)の事ハ年でハござりませぬ心ゆへ揃(そろ)ひ
やまりますもはなひあつて以ていまずと玄(げん)関(くわん)
前(まへ)の番も桶(おけ)の水(みづ)を見ぐしかけあるくば
彼(かの)女どもむかつて湯(ゆ)をあつかひなさりませ
とをもむれすきつれず足(た)を洗(あら)ひ茶肉

かまくせ通りなる二ヶ所之間にて小なる座敷
にありし奴あまりをとられで黄金をのぐ身ぬ
ごくきらびやかなる尾をつが申し出されし
あばらくして彼男出でしあれし而自ら
帰りきたませしとしば玉もなくさしとらへて
出来るせひハまつさへともに天り関想燃よさあり
羽折籏を着し律衍ちなる猥褻とさし
いかにも世路えしき重役人みしとさ
ゆかんと思ハれし宮飾自ら細らしく着なし
して先にて御宿の年絵を入れられし

御膳人柱ざくはよあいかなより御取なぞ九
し御方かくは御出でこし御問いかれ候ふ路ちき
を駿河にて京都より着きよしく参るの里
京都御代ぞく繰り合ば丁まで御様御膳
縁の雨天続きし御つれもなし都入り
かくし御難儀さらし上ちより此雨ハ陰
都しれ剋限なるまれハ中し一両日でも
それまでへん御到より膳の御自由御連
の御むづかしもなし又揚宅に御泊り
なされてさ猥整むるなし御むつかき

なく往来なれ候まで寛く御逗留なされ
御労れをも休めらるべく候と念じ参らせ候
是は誠に地獄に仏とぞ存じ参らせ
候さてすぐしかたのおもひ先年ハよんどころ
なく御無心申しましさに早速に御深切
に御丁寧なる御挨拶にあづかり難有
りまゐらせ候ふ様ぞ一段御とめなかまへハ
せうくの彩ひを御察りませぬかあまりすく
り摂ひなりまかりとぞひりるが色く
ぬなりしまる便り御丁寧様ハ当地乃御

役人なくて御座なされず中々問ひなされずあるべく
而して当所の役人なく御ことわりまをし御前
町の者どもハ借家が支配でござるなどいと念
頃よりしまかし衆もなや御時分もよかるべし
敵方と出合ひをあげませうと言ひますれば必
しく御世話御心づかひ下され候て挨拶
しなるよいはく何も御世話ハ致しませぬ
親ども家内御くまもる敵方あひをとまで
此なるまじく年なれハ何も御頼りまをしまあ
まづお労れども御心持りものせいあるべく

御休息なされませといひ捨て縁へ入ける
まる屋しきへ女中あまたありきて御膳をあげま
するが御菓子ひれ書しては御風呂をも留られ
ましておゆをめしまするを御へはいれハ
ゆき色の御帯をぬぐひさまでまたなくまづ御湯をま
いりませといへばきつしてめし一ツ御なをす
ませしく彼女の手燭をともしておくへ立
案内をしまかせ跡に付ひまく縁がわへ
出ていくかハ折曲り跡縫て障子の
うちへいく間あるやうんと思ひ行つまり

湯屋に入りけれバ入口より前後の夜
桁に手拭を懸の浴衣を掛てぬぐひをうけ湯
屋のうちハ光るやうに寄麗に腰板
をみがき敷石もかゞやきそのかゞやき
中くらゐなるものなれどもさすがに塵なく遠入
らぬをこころもよけれど今さらいてすより
もなれずに思ひ結はかけれど風呂のうち
りを調えて身のうちしほ角をとひ結
もハ中洗ひ度しぬるくもあつくも自
在のありさま湯加減しかりつるあて

小座敷より立ならべまでつまとひとなつく
珍饌(ちん)のちそうけれども二汁(ふ)七菜(さい)山海
の珍(ちん)味(こ)残らず扇(せん)桃(?)ハ高(かう)蒔絵(まきゑ)猪口(ちよく)
皿(さら)の数ひきも南京(なんきん)高麗(かうらい)朝鮮(てうせん)いづれも
あざやかなる器(き)物(ぶつ)ハなかなか以まの(?)手(?)数(?)
尽し珍(ちん)膳(こ)箸(ひ)肴(?)らずめづらしき酒(?)を
きこし(?)召(?)ても御(?)よろこびなされ候
て清(さ)談(?)まりなかなか人(?)を能(?)
ましさゆるされ申し足(あし)音(おと)をも
まかしやつい(?)らし先(さき)々(?)の御(?)帰(?)

さびしさハ言(こち)葉ましたく候へバ御(?)根できて
御たのしみまゐらせ候がゝる人の中解(げ)ましさ(?)
参られバ少しも心をましておもはしの
御相(あいて)手をつかまつりまゐらせ候とめで度(?)より
肩(き)をもしみ足(あし)指(?)さすりなからもまゐらせる
外(ほか)ハ手習たづさへさせて廣(ひろ)き御住(?)居
屋(?)御丁寧に御家(か)内(?)しるみ宮(まさ)めて平生(へいぜい)
御たのしみ肴(?)なるべし然ばさん何卒乃
御なぐさみが御座候て聞(と)をあまた御田舎(いなか)
の年始ぐらしも年中気楽(この)しきものでござ(く)

されますが茶の湯謡謡鞠香などハ為
論語も立花ハ気が詰るとしてそれハ
アヽしろ流のなげ入きりもちやりますが
是もちやの湯ハむつかしけれバ書をならうが
おやりなされませねへ祇園の鐘も段
されバとて剣術ハ三味線ハ
を弾きなさるときけバおしやりやれどもお
ハ的ありませんといふあたま絵ハぞんじやと
同じことあれ是おしまひまするとさへま
きぬ園芸などを江戸へありましたがきけバ

あくまでしたゝかなる色くまで
しかるに寝ることそれで入湯
入り食ハまづわれらしもちら
よくぞ寝もしまへ勧りが来て何の
綿気あしかくこれそれも又ぬ袖
といふこそ思へば言いふゆきゴウし

本の張見世里巻之二